

# 洞窟教会および壁画の調査記録と考察

## —サン・ジョヴァンニ教会—

宮下孝晴<sup>\*1\*2</sup>・宮下睦代<sup>\*2</sup>・江藤望<sup>\*2\*3</sup>

### Investigation and Consideration of Cave Churches and Mural Paintings

#### Chiesa di S.Giovanni

Takaharu Miyashita<sup>\*1\*2</sup>, Mutsuyo Miyashita<sup>\*2</sup> and Nozomu Eto<sup>\*2\*3</sup>

The field research of Chiesa di S. Giovanni located in Comune di San Vito dei Normanni, Provincia di Brindisi, Regione di Puglia was held in September, 2013. We summarize the current conditions of architecture and murals, and organize the future research points.

**Key Words:** cave church, mural paintings

キーワード: 洞窟教会, 壁画

#### 1. 地理的位置とロケーション

N 40° 38'23.7" / E 17° 48'18.4"

サン・ジョヴァンニ教会は、サン・ヴィート・デイ・ノルマンニから16号線をまっすぐに東のプリンディジ方向へ10kmほど進み、予備調査で訪れたサン・ピアジョ教会(『研究調査レポートVol.2』, No23)のあるジャンヌッツォ農園(Jannuzzo)の手前を右へ折れてカファーロ農園(Cafaro)方向に2kmの位置にある。現在はジャンニ・ヴィーヴァ(Gianni Viva)氏所有の白い納屋から5分ほど歩いたカナレ・レアーレの谷あいにある。付近には段丘の岩肌を掘り抜いた洞窟がいくつも存在しているが、それらが教会であったとは思えない。ただし、ジャンニ・ヴィーヴァ氏の案内で農園から南西に500mのところにある洞窟(地下)教会の存在を知らされた。大雨の後、あたりの水が引き込まれるように流れ込んでいくので、付近の石をどけてみて発見したのだそうだ。正式な調査も行われていない未登録の洞窟教会ということになるが、手続きや管理が大変なので、入口周辺に棘のある植物を植え込んで隠してあるとのことであった。

カナレ・レアーレの低くゆったりした谷間に水が流れることは今はなく、川の流れはもっと西にずれている。段丘状の凝灰岩も建材としてほとんど切り出されたようで、自然の岩肌で

はなく、すべてチェーンソーで切断した階段状の断面が露わになっている。教会の北側面の一部も、そうした石の切り出しの際に崩壊してしまったのであろう。崩れてしまった開口部を(同質の)石ブロックを積んで塞ぎ、壁体を外側からも補強してあるが、おそらくは教会内の換気のために石ブロック1つ分(約20×40cm)だけを残して窓としている。

#### 2. 建築について

教会は南北の奥行き(長軸)が7.70m、幅が5.20m、高さが2.30mの空間。直径1mの半円アーチをもった入口は教会の長軸(南北)に対して横(西側)に設けられ、身廊部に直接入る。この半円アーチの中央すぐ上のファサード面に縦横20cm(おそらく2つの)ギリシア十字が刻まれている。階段を3段下りて、半円アーチの入口をくぐるが、普段は鉄格子の扉が閉まり、ヴィーヴァ氏の管理下で施錠されている。長方形の空間は、入口から2mほどのところに立つ1本の角柱(約80cm)を支点として東、西と北の3方向に半円アーチが伸びて、空間を支えている。しかし、3本のアーチの支点となっているその柱は、(自然に折れることは考えにくいから)何らかの理由で破壊されたのであろう。現在は、5つの石ブロックを応急的に積み上げて補強してあるが、これは中央後陣の主祭壇部分の石を切断して積み上げた可能性もありそうだ。また、その奥には近年(といっても1960年代には既に存在していた)の補強として、凝灰岩のブロックを積み上げた角柱が天井壁を支えている。

堂内の南側の壁面には、3つの壁龕を設けて後陣としている。この教会の建築プラン(Fig.1)からみた特徴は、右後陣の手前1.20mの位置に、西側の壁から厚さ0.20mの障壁が1.30mほどの

\*1 人間社会研究域 歴史言語文化学系

\*2 金沢大学プレスコ壁画研究センター

\*3 人間社会研究域 学校教育系

\*1 Institute of Human and Social Sciences, Faculty of Letters

\*2 Research Center of Italian Mural Paintings

\*3 Institute of Human and Social Sciences, Faculty of Education

### 3. 壁画について

幅で張り出していることである。内陣を簡易的に仕切ろうとした一種のイコノスタシスと考えられる。もともとは左側にも同じような張り出しの障壁があり、後世になって取り除かれたのではないかという推論のもとにその可能性を探ってみたが、反対側の東壁や天井壁の同じあたりに張り出し障壁のあった痕跡はまったく見当たらず、片側(西)だけの簡易障壁としか考えられない。なお、この障壁は長方形であったと思われるが、現在は左下方の一部が切断されている。障壁には堂々たる「大天使ミカエル」が描かれており、その赤い枠線や図像の一部が切断されていることから、この不定形は当初のものではなく、後世に切断されたものと判断される。

入口の右側基礎の部分から西側壁および張り出しの内陣障壁下部までは、2~3段の凝灰岩ブロックを積んでしっかりと補修してある。教会の北側面の一部の修復については前述の通りで、このような窓が創建当初に設けられていたわけではなかった。

なお、現在では(数段の階段を下りる)半地下の洞窟教会の様相を呈しているため、クリプタ・サン・ジョヴァンニ(Cripta S.Giovanni)とも呼ばれるが、(発掘調査などの検証によって)おそらくは創建当初の地平は教会堂内と同じレベルではなかったかと思われる。このあたりは段丘状になっているため、上方からの土砂が時代とともに下方に堆積し、教会前の地表レベルを上げてしまったのではないかと推測している。

この洞窟教会の壁画は、西側壁に描かれた「聖母子」、「洗礼者聖ヨハネ」、「聖クレメンス」、および西側壁から突き出た形の内陣障壁に描かれた「大天使ミカエル」の保存状態がよく、中央後陣の壁龕に描かれた「デエシス」とともに聖人名などのモノグラムも判読可能で、図像学的にも今後の研究が期待される。ラテン語表記が多く、壁画の制作は12世紀末から13世紀初めと考えられるが、ギリシア語の注釈が付されているものもある。ビザンティン様式の特徴を強く示している「大天使ミカエル」の制作は、11世紀にさかのぼる可能性もある。なお、北側の壁面に描かれた「聖ロクス」と「聖母子」の制作は15世紀以降であろう。

#### (1)西(右)側壁

入口を入れて右側壁と内陣障壁に挟まれた一角が、この教会堂内では最も壁画の保存状態がよく、乾期には表面に浮き出た塩のために全体が白っぽく見えるが、色彩はよく残っていて、湿度の高い時期には彩色が鮮明に見える。2011年9月に予備調査で訪れた際にはプーリア州文化財監督局の担当者も参加しており、所有者のジャンニ・ヴィーヴァ氏が大型噴霧器で壁面全体を湿らせてくれたお陰で、鮮明な色調を観察することができた。

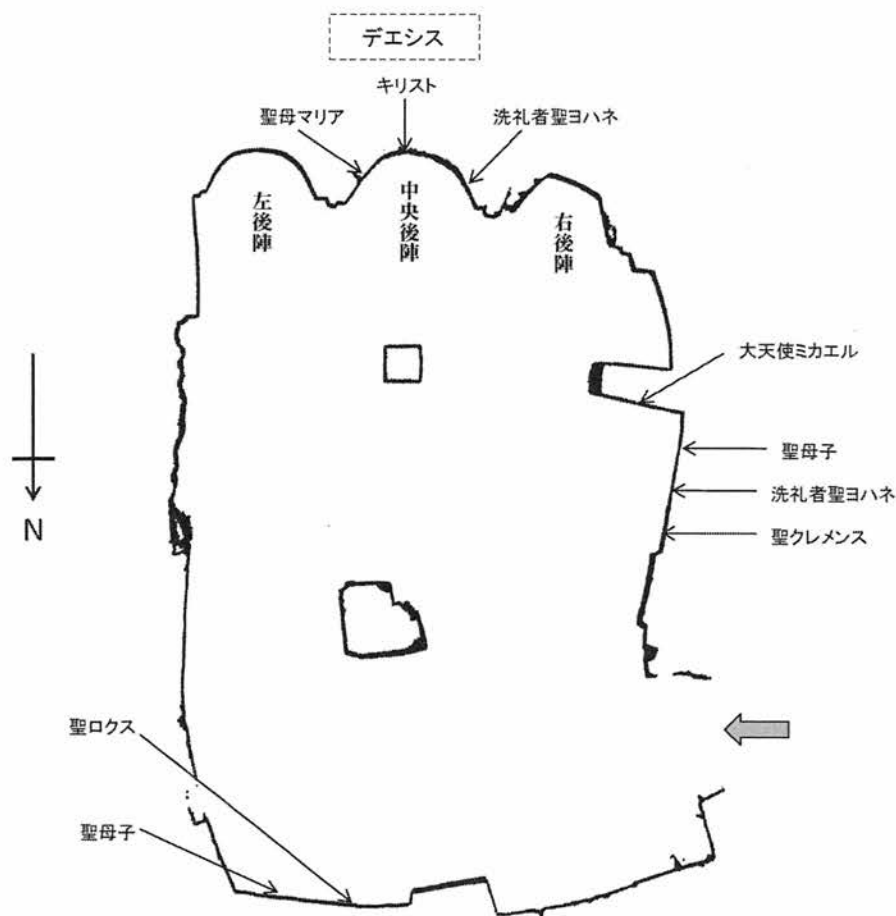


Fig.1 3D スキャニングしたデータから作成したサン・ジョヴァンニ教会の平面図

Fig.2 洗礼者聖ヨハネが手にしている巻物

天井からアーチが右側壁に下りてくる僅かな張り出し部分と内陣障壁に挟まれた右側壁の一区画（赤い枠内の同一空間）には、左から「聖母子」、「洗礼者聖ヨハネ」、「聖クレメンス」の3人が描かれている。3人の間に枠線や柱などの仕切りはなく、時代を異にする聖人たちが同一空間に描かれており、14世紀以降に見られる「聖会話」（Sacra Conversazione）形式に先んじた作例であると言えよう。この西側壁画が（14-15世紀に流行した）「聖会話」の性格を強く感じさせるのは、時代を異にする聖人たちが同一空間に描かれているというだけでなく、画面中央の玉座に坐った（正面向きの）「聖母子」の左右に聖人を配する伝統的な礼拝図の形式とは異なり、「聖母子」を画面の左端、教会堂内の一角に配置して堂内に入ってくる者を迎える向きと位置に配したことであろう。幼子イエスを左腕で抱きかかえる聖母マリアの円光の左右に"MAT" "DNI"（聖母）の銘記がある。

褐色と白で陰影をつけたオーカー色の衣服に包まれた幼子イエスは、左手に巻物を持ち右手で祝福の印相を示している。指先部分の彩色が剥落しているため、祝福の印相がギリシア式であったかラテン式であったかの判断は難しいが、よく観察すれば、人差し指と小指だけを立てたギリシア式であると判断できそうである。ちなみに右側の「洗礼者聖ヨハネ」も同じ形式の印相で、1世紀末のローマ法王であった「聖クレメンス」のみがラテン式で祝福を与える印相の形をしている。ただし、この人差し指と小指だけを立てた印相が一般的ギリシア式と呼べるかどうかには問題がないわけではない。一般にギリシア式印相として知られているタイプは、親指と薬指を接して人差し指と中指と小指の三本を立てるものだが、ここに見られるタイプはそれとも少し異なり、厳密にはアトス修道院の系統<sup>1</sup>を引くものであると言えよう。

なお、円光に十字装飾模様が描かれているのはイエスのみである。「聖母マリア」も含めて、「洗礼者聖ヨハネ」も「聖クレメンス」の円光も同じ（金箔の代用である）オーカー色の円光にシノピア赤と白の縁取りがあるシンプルな型である。「聖母マリア」の衣服やその周辺には円形ないしは渦巻き模様が描かれているかに見えるが、これは描画層の下の凝灰岩の岩盤自体の肌理の影響で、壁画の表面に大小さまざまな円形模様が浮き出ているように見える現象で、その最も顕著な例を、カルピニャーノのサンタ・クリスティーナ教会壁画で見ることができる。

「聖母子」に向かって右側、つまり画面の中央に「洗礼者聖ヨハネ」が描かれている。円光の左右に振り分けて"S. IOHES BATTITA"（洗礼者聖ヨハネ）とラテン語で記されているので間違いはないが、衣装については赤いチュニカ（長衣）に（現在は剥落して下塗りの赤が見えているが本来は）青いマントという前例のない表現が与えられている。図像学的な特徴であるラクダの皮衣（毛皮）については、赤いマントの（三つ編み状に見える）縁取りが代用しているのであろうか。右手は（変形であるが基本的には）ギリシア式の印相で祝福を与えている。本来の伝統的ギリシア式であれば、中指も立って、人差し指、小指とともに3本が立っていなければならない。左手には巻物（Fig.2）をさげているが、確実な判読は困難とされて

きた。4行にわたる銘文の判読は、"E...C...A...U DEL...TO LLI... CCA..."<sup>2</sup>。

最初の2行については洗礼者聖ヨハネの図像学的伝統からしても、『ヨハネ福音書』（1:36）にある「見よ、神の子羊」（"ECCE AGNUS DEI"）と読んで間違いのないであろう。そして、その後が続くのは『ヨハネ福音書』（1:29）にある「世の罪を取り除きたまえ」（"QUI TOLLIT PECCATA MUNDI"）である可能性は高い<sup>3</sup>。

いちばん右には紀元1世紀末のローマ法王であった「聖クレメンス」が、左に司教杖を持ち、ミサを行う時に着用する（臙脂色に格子柄の）司祭服カズラをまもって描かれている。円光の（向かって）左側には、縦書きで"S CLEMEC"と書かれている。王冠は法王冠の中世型三重冠であろう。

### (2)張り出し内陣障壁

画面いっぱい大きな翼を持つ「大天使ミカエル」が正面向きで描かれている。赤い枠線で囲まれ、それは右に接続している西壁の壁画と違和感なく連続していることから、同時期の制作と思われる。

「大天使ミカエル」は右手に細槍（ほとんど剥落している）、左手にはオーカー色の球を持ち、その球には臙脂色で十字架とミカエルのギリシア語モノグラムが書かれている。ビザンティン様式特有の服装デザインは（彩色や装飾模様のディテールは異なるが）、基本的にはサンタンジェロ・イン・フォルミス教会後陣に描かれた大天使ミカエルと同系統のものである。深いイエローオーカーで地色を描き、臙脂色で模様を描き込み、そこに石灰クリームの白で円を描いたり、斑点を描いて豪華な装飾に仕上げている。その大きさ、その存在感は「デエシス」の「審判者キリスト」を凌ぎ、この南イタリアに根を張った聖ミカエル信仰を物語るものである。

「大天使ミカエル」の中心を垂直に、墨縄を打った痕跡が見られる。ただし、顔の部分だけには墨縄の跡がないので、そこだけ墨縄打ちを避けたか、顔の描写の際に石灰クリームを塗り直したかのどちらかであろう。石灰画法で制作を進めたと推測すれば、まず壁面全体に石灰クリームを塗ってから墨縄を打って描き始めたということで、上半分を終えてから下半分に描写を進めたわけではないことがわかる。そして、必要に応じて、石灰クリームを塗り重ねながら描写を進めたのであろう。石灰クリーム層の厚みもほとんどないので、漆喰層を鏝で塗ったとは考えにくい。豚毛の大きめの筆で塗ったと思われる。これは前述の「洗礼者聖ヨハネ」や「聖母子」でも同様である。なお、この障壁の裏側には壁画の痕跡はない。

### (3)後陣

#### ①中央後陣

南壁に設けられた3つの後陣のうち、中央後陣にはビザンティン様式の伝統にしたがって「デエシス」が描かれ、中央に「審判者キリスト」、代願者としての「聖母マリア」が向かって左、右側には「洗礼者聖ヨハネ」がいずれも立像で描かれている。「キリスト」も玉座に坐ってはいない。いずれにしても、かつては中央に石ブロックの祭壇が設けられていたのも、キリストの下半身は描かれることはなかった。

モノグラムもかなり残っていて、「キリスト」の円光の左右

には"IC" (=イエス) "XC" (=キリスト), 「聖母マリア」の手のあたりには"MAT-DNI" (神の母), 「洗礼者聖ヨハネ」の顔の左右には"S-IOhES" (聖ヨハネ) と"BATITITA" (洗礼者) の表記がはっきりと読み取れる。また, キリストが左手に持つ開かれた聖書には, 欠損したり略されたりしてはいるが, ラテン語で "Ego sum lux mundi, qui sequitur me non ambulat (in tenebris)" (私は世の光である。私に従ってくるものは, 闇のうちを歩くことがなく, 命の光をもつであろう) の一文を読むことができる (『ヨハネ福音書』8:12-13)。なお, 壁画が欠損しているため不明瞭ではあるが, 「キリスト」の右手は (明らかに小指は薬指とともに曲げられているので) 人差し指と中指の2本を立てたラテン式の印相で祝福を与えている。

「聖母マリア」と「洗礼者聖ヨハネ」は開いた両手を「キリスト」の方に差し出すようにして, 左右から代願している。ここで特筆すべきは「聖母マリア」の右手と「洗礼者聖ヨハネ」の左手の表現で, 画家は親指と人差し指の間の《水かき状》の部分の表現にこだわり, 強めの輪郭線で強調しただけでなく, 鋭いもので引っ掻いてズグラフフィートの刻線で立体的構造を明らかにしようとこだわった形跡が認められる。

「キリスト」のオーカー色に彩色された円光内に臙脂色と白で施された十字装飾模様は, 西側壁に描かれた「聖母子」の幼子イエスの円光とまったく同一である。

「デエシス」部分は, 岩盤に直接石灰クリーム (約 1mm) を塗って描いた石灰画であり, アツリツォないしはイントーナコの漆喰下地の層 (あるいは「デエシス」以前に描かれた壁画層) は確認できなかった。また, この中央後陣の壁画にはかなりの青色が残っており, 青色の存在は色差計でも確認された。また, 中央後陣アーチ部分の装飾は幾何学キュービック模様で, その上に左右の後陣壁龕の漆喰が被ってきているので, まずは中央後陣が先に完成していたと思われる。

ところで, 中央後陣には大きな石の祭壇が設けられていた。もちろん, 掘り抜いた教会なので, 祭壇も後で設置したのではなく, 後陣削り型を掘る際に祭壇部分を掘り残したわけである。後陣壁, つまり「審判者キリスト」の下方と後陣前の床面に基礎部分が残っているので祭壇のサイズがわかる。幅 100cm, 奥行き 79cm, 高さ 101cm の直方体であった。後陣に描かれた「デエシス」の「キリスト」は, 上半身だけを見せて祭壇の背後に立っていたことになる。一方, 代願者である「聖母マリア」と「洗礼者聖ヨハネ」は, 足下まで描かれていた。

#### ②右後陣と左後陣

中央後陣の左右の壁龕には, (少なくとも中央後陣のように) 石の祭壇が設けられていた形跡が床面には残っていない。ただ, (向かって右の) 後陣削り型の左右の側壁には (石材か木材かはわからないが) かなり厚い棚板を差し渡す際に削った痕跡が残っている。壁画の唐草模様の一部が欠損していることから, 壁画が描かれた後に削られたことがわかる。

左右の後陣は, 「デエシス」を挟んで対をなす壁画装飾だが, その時期は「デエシス」が描かれた時代よりもずっと後 (17世紀?) と推測される。大きな壺に生けられた色も種類も豊富な花が (緑豊かな葉の中に差し込まれる形で) 描かれており, 背景をオーカー色の大胆な唐草模様で包み込んでいる。

#### (4)北側壁

入口を入ってすぐ左側の壁で, 中央の柱から三方 (東, 西, 北) に架けられたアーチが北壁に流れ込んだ右の空間に描かれているのが「聖ロクス」と「聖母子」で, おそらくは大きな赤と白の外枠で囲まれた同一空間に描かれているように思われる。「聖ロクス」と「聖母子」の間に黒い縁取りのある白枠が両者を隔てているかに見えるが, 奥の空間は連続していると想像したい。なぜなら, (巡礼杖を左手に持った) 巡礼姿の聖ロクスは衣の裾をたくし上げて左腿の黒斑からの出血を, 「聖母子」に示しているように見えるからである。聖ロクスはペストに対する守護聖人として 14 世紀から 16 世紀にかけて人気のあった聖人であり, 堂内に描かれたその他の聖人像と比較しても様式的にみても (イタロ・ビザンティン様式は微塵もなく) かなり遅い時代であることは明らかである。制作年代を断定する材料は何もないが, 15 世紀以降であろう。ただし, 徹底した斜光線照射による調査によってもジョルナータを継いだ形跡はまったく見当たらず, 技法的には (広義の) 石灰画であると考えている。なお, 聖母マリアの足下の白線枠にアラビア語の祈祷文と思われる痕跡がある。

#### (5)壁画の制作年代について

教会堂内に現存する壁画の制作は 3 期に分かれている。第 1 期は, 「デエシス」(「キリスト」と代願者の「聖母マリア」と「洗礼者聖ヨハネ」) が描かれている中央壁龕部分と入口右壁一帯の壁画である。この「デエシス」に描かれた「キリスト」, 代願者の「聖母マリア」と「洗礼者聖ヨハネ」の 3 者は西壁にも描かれており, 表現様式的にも, 図像学的にも非常によく似ているため, 両者とも同時期, あるいは同じ系統の制作者と考えてよいのではないだろうか。たとえば「審判者キリスト」と「幼子イエス」の円光の十字装飾模様が一致している点, 「洗礼者聖ヨハネ」の (三つ編み状の) 毛皮で縁取りした衣, 「聖母マリア」の表現など, 酷似している点は枚挙に暇がない。

第 2 期は入口を入った左の北壁に描かれた「聖ロクス」と「聖母子」である。

第 3 期は 3 つの後陣のうち, 左後陣と右後陣に描かれた大胆な花の装飾部分で, 「聖ロクス」と「聖母子」の推定制作年代よりもさらに遅く, 17 世紀頃かと思われるが定かな根拠があるわけではない。

#### 註

- 1 www.lerino.com
- 2 Alba Medea, "Gli affreschi delle cripte eremitiche pugliesi, I", Roma, 1939, P.102
- 3 Antonio Chionna, "Chiese, cripte e insediamenti rupestri del territorio di S.Vito dei Normanni", Grafischena, Fasano(Brindisi),1968, P.23

#### 参考文献

- Antonio Chionna, "Gli insediamenti rupestri della provincia di Brindisi", Schena Ed., Fasano(Brindisi), 2001
- Antonio Chionna, "Chiese, cripte e insediamenti rupestri del territorio di S.Vito dei Normanni", Grafischena, Fasano(Brindisi),1968



サン・ジョヴァンニ教会  
(サン・ヴィート・デイ・ノルマンニ)





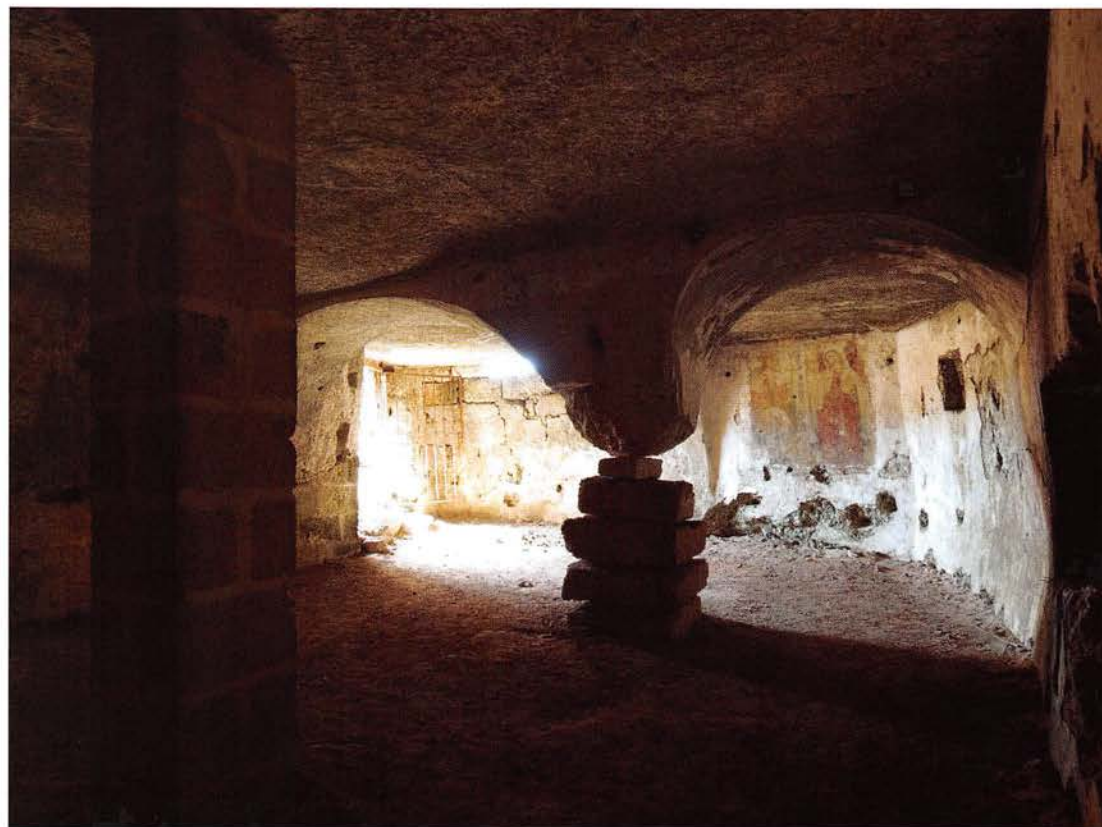
後陣の前には近年の補強とみられる角柱が天井壁を支えている



イコノスタシスには「大天使ミカエル」が描かれている



中央の壁龕には「デエシス」、左右の壁龕には一対の花かごが描かれている



北側の壁面：「聖ロクス」と「聖母子」



「洗礼者聖ヨハネ」(斜光線照射)

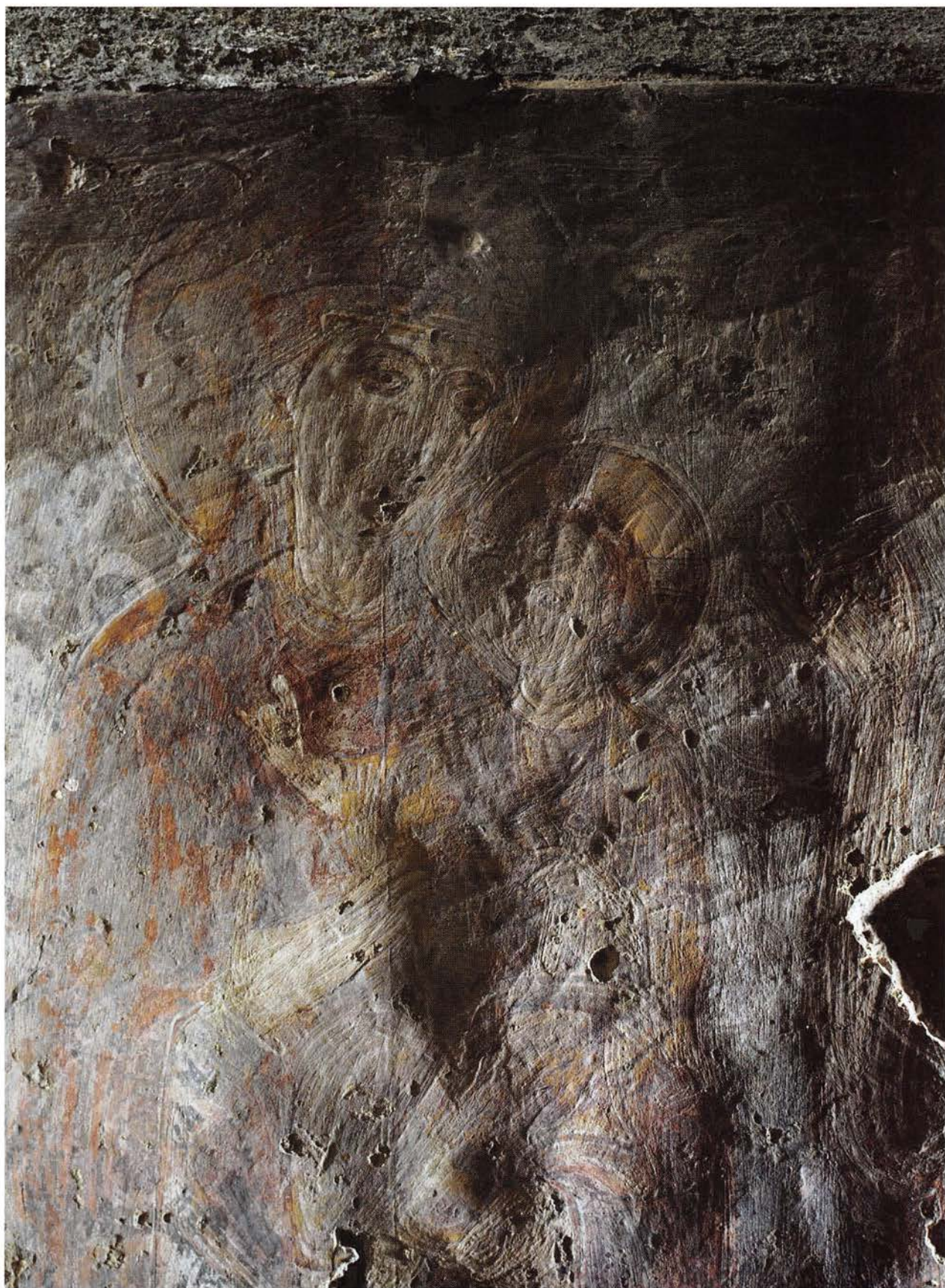


「洗礼者聖ヨハネ」(散乱光照射)



西側の側壁：「聖母子」、「洗礼者聖ヨハネ」、「聖クレメンス」





「聖母子」(斜光線照射)



「大天使ミカエル」(散乱光照射)



「大天使ミカエル」(斜光線照射)



「大天使ミカエル（下部）」（散乱光照射）



「大天使ミカエル（下部）」（斜光線照射）



「デエシス」：(左から)「聖母マリア」、「キリスト」、「洗礼者聖ヨハネ」



「聖母マリア」の手



「洗礼者聖ヨハネ」の手 (散乱光照射)



「洗礼者聖ヨハネ」の手 (斜光線照射)